「発生の場」展レヴュー

上村卓大の作品について

SMAART 受講生　末次広幸

ガラス張りの佐賀大学美術館に着くや否や、ひときわ巨大でカラフルな作品が目に付く。『無題（20171218)』である。

上村氏の作品を初めて見て感じるのは、一見形がとてもシンプルで、取り立てて造形的な思惑があって形態を考えてはいないのでないか、というとても失礼な思いである。一見どこぞの公共空間に置いてある彫刻の体で鎮座するその作品は、よくよく見るとやはり積み木の巨大なレプリカではないか。見回せば、巧妙に抽象絵画を装った巨大なキャンバスがある。

「装う」と言えば隣で今度は絵画の体をした巨大な半透明の樹脂の作品がある。少し斜めになった中の木枠や植物の枝が透けて見え、一見絵画的な構図やイメージが練られているように見える。その手法による小さな作品群、特に赤や青、黄などの糸を封入したような作品は、どこかしら描かれていないノートのような印象があり、書き込まれる文字を待っているようで見入ってしまう。

何か無機質で、できる限り作り手の痕跡や癖を消してしまったかのような見かけを持ちながらも、作家の美意識が現れては薄れする作品達である。そのため、カッティングシートの切れ端を貼った『聖者の行進（右利きの楽団)』もはじめは何らかの規則に則り、機械的に貼っていった作品なのではと疑ったがそうではなく、感覚的な色や形のつながり、イメージの生成を感じながらの制作であると作者は話していた。とても絵画的な手順である。

そうした、見かけと手順のギャップは、外に置いてあるベルトの切れ端ではどうなっているのだろうか？（『乾いた石（日光浴)』）どうやら鋳造してあることはよく見るとわかり、本物を克明に再現したいわけではないようだ。作者によれば、「足をあげて日光浴をしているように見えた」ことがきっかけとしてあるようだ。それは、子どもが描いたなぐり描きを巨大に拡大した作品と同じようなレヴェルでのきっかけとして。しかしそれをなぜ彫刻を装った作品にしたのだろうか。

上村氏の作品は、きっかけ・手順・見かけが様々にスライドする。スライドによって生じたズレに、彫刻や絵画や自分や自分でないものが流れこむような間（ま）を生じさせている。そうやって生み出される作品のあり方によって、間（あいだ）で生成する自己や彫刻を定義しているような作品群である。